

# The International Society of Sculptors Painters & Gravers と日本人芸術家

—— 1910年代の展覧会目録にみる在英日本人画家の出品とネットワーク

林 みちこ

## はじめに

明治以降、画学生の留学先としてはフランスが圧倒的に多かったが、同時期にイギリスを選んで留学した画学生もいた<sup>①</sup>。日本人留学生たちは主にロンドンに滞在して研鑽を積み、同地では気の合う仲間が集まり、いくつかのグループができていたようである。これらの小集団のつながりは展覧会への出品にも関わっていた。筆者は、1903年(明治36)–1918年(大正7)までロンドンに留学した石橋和訓(1876–1928)について調査しているが、石橋を取り巻く人間関係は残された書簡等からある程度うかがえるものの、まだ不明な点が多い。それは石橋以外の在英画家についても同じである。フランス留学の画家たちについては「パンテオン会」<sup>②</sup>など研究が進んでいるが、ロンドンの画学生についてはこのように団体を結成していなかったためか実態がつかめていない。なかでも1910年代の在外芸術家の動きは、国内外で起こった芸術思潮、例えば1910年の『白樺』創刊や高村光太郎の「緑色の太陽」、また後述するロンドンの「ポスト印象派展」、イタリア未来派など、多くの新しい運動や傾向があらわれた中、注目すべき事項のひとつである<sup>③</sup>。

本稿は、美術史研究におけるリソースのひとつである「展覧会目録」について、特にデジタルアーカイヴ化されていない、また日本国内の図書館には通巻での所蔵がなく、海外図書館でも所蔵館が少ない、稀少な展覧会目録 The International Society of Sculptors Painters & Gravers (国際彫刻家・画家・版画家協会、略称 ISSPG) を、全巻所蔵しているロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (Victoria and Albert Museum) 内の図書館 (National Art Library) において集中的に調査した結果をまとめたものである。なお同協会名の和訳と略称については、初代会長ホイッスラーに関する最新の展覧会である2014–2015年の「ホイッスラー展」図録に依拠した<sup>④</sup>。

先行研究のなかでは詳しく言及されることがなかったこの協会について、展覧会目録の小冊子を詳細に調査した結果、イギリスにおける美術展覧会への日本人画家の出品状況の一端が明らかとなり、そこから滞英画家のつながりや石橋和訓に関わる新発見があった。以下にその要点をまとめる。

## 1. 1910年代ロンドンに滞在していた日本人画家たち

明治期にイギリスで絵画を学んだ先駆者としては国沢新九郎<sup>⑤</sup> (1847–1877; 滞英期間 1870–1873, 計4年間) が知られており、先述した石橋和訓 (1876–1928; 滞英期間1903–1918, 1920–1923, 計18年間) は留学前に国沢門下の本多錦吉郎 (1851–1921) に洋画を師事したので

国内に居た頃から英国画派の系譜に連なっていた。

石橋のほかに1910年代のロンドンに滞在していた日本人画家には次のような人物がいる。牧野義雄<sup>⑥</sup> (1869–1956; 滞英期間 1900–1923, 1927–1942, 計38年間)、松山忠三 (1880–1954; 滞英期間 1910–1954 計44年間※戦後イギリスに帰化)、武内鶴之助<sup>⑦</sup> (1881–1948; 滞英期間 1909–1913, 計5年間)、栗原忠二<sup>⑧</sup> (1886–1936; 滞英期間 1912–1924, 1926–1927, 計13年間)、佐藤武造 (1891–1972; 滞英期間 1914–1924, 1932–1939, 計17年間)、久米民十郎<sup>⑨</sup> (1893–1923 滞英期間 1914–1918, 1921–1923, 計8年間)、高木背水<sup>⑩</sup> (1877–1943; 滞英期間 1910–1913, 計3年間)、白瀧幾之助 (1873–1960; 滞英期間 1904–1911の間に約3年半)、漆原木虫 (由次郎; 1888–1953; 滞欧期間 1910–1945)<sup>⑪</sup> などである。

彼らより少し早く留学し1910年代には既に帰国していた画家には下村観山 (1873–1930; 滞英期間 1903–1905 計3年間※最初の文部省留学生)、原撫松<sup>⑫</sup> (1866–1912; 滞英期間 1904–1907, 計4年間)、南薫造<sup>⑬</sup> (1883–1950; 滞英期間 1907–1910, 計4年間)、高村光太郎 (1883–1956; 滞英期間 1907–1910, 計4年間)、などがおり、なかでも原はその後長期間にわたり在英した牧野義雄と親しく交友したと伝わっている。

## 2. The International Society of Sculptors Painters & Gravers について

The International Society of Sculptors Painters & Gravers は1898年から1925年まで活動した美術団体である。初代の会長はジェイムズ・マクニール・ホイッスラー (James McNeill Whistler, 1834–1903) であり、ホイッスラーの没後はオーギュスト・ロダン (Auguste Rodin, 1840–1917) が会長を継いだ。展覧会は初期にはリージェント・ストリート (Regent Street) のニュー・ギャラリー (New Gallery) で1年に1度開催されたが (1904–1909)、その後1910年からグラフトン・ギャラリー (Grafton Gallery) に会場を移し1912年まで年1回開催される。1910年のグラフトン・ギャラリーと言えば、批評家のロジャー・フライが「マネとポスト印象派展」 (Manet and the Post-Impressionists) を企画開催し、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガンなどを紹介したことはあまりにも有名である。美術史で使われる「ポスト印象派」の言葉はこの展覧会で生まれた。それほど大きなエポックを作った展覧会が行われた同じ会場で同時期に展開していた国際的な芸術家たちのグループ展が ISSPG 展なのである。1913年からはグロヴナー・ギャラリー (Grosvenor Gallery)<sup>⑭</sup> に移り春・秋の年2回開催となって1919年まで開催された。1920年の開催はなかった模様で、1921年に再びグラフトン・ギャラリーに戻ってから

は年1回に戻り、1922年も開催している。

今回の調査では日本人画家の出品が予想された1910年代の目録を重点的に閲覧・撮影し、その前後、1908年頃から1920年代も内容を確認した。なお目録は冊子体で、サイズは14.7×11.7cmと小型、総ページ数100ページほどの冊子が現在は年度ごとに合本され図書館用に製本した状態で閲覧可能である。

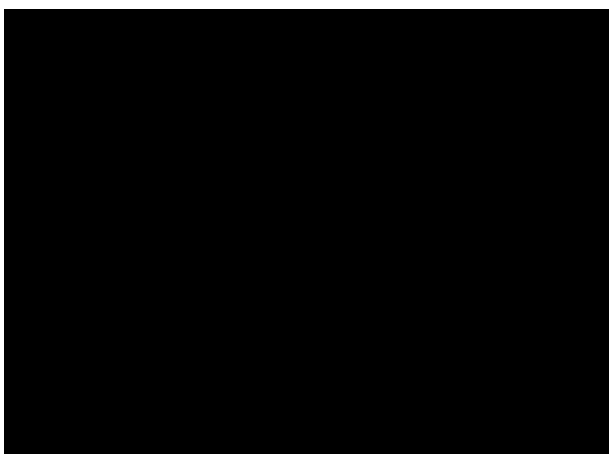


図1 National Art Library での所蔵状況

目録には毎号 ISSPG の組織と沿革が記載されている。そのページから、同会の概要をまとめてみたい。

1908年の目録によれば会長がオーギュスト・ロダン、副会長がウィリアム・ストラング、名誉幹事がフランシス・ハワード、名誉弁護士・会計士がウィリアム・ウェップであった。役職なしのカウンシルのメンバー15名のうち著名な芸術家を挙げると、フランスのジャック・エミール・ブランシュ、イギリスのチャールズ・リケッツ、チャールズ・シャノンなどがいた。名誉会員にはジョヴァンニ・ボルディーニ、カロリウス＝デュラン、グスタフ・クリムト、マックス・クリンガー、アルフォンス・ルグロ、ジョン・シンガー・サージェント、フランツ・フォン・シュトック、フリッツ・フォン・ウーデなどの名前がある。また芸術家以外の名誉会員の名前はこの団体が「インターナショナル」の名を冠していることを明確に示すもので、例えばシュレスヴィヒ・ホルシュタインの皇太子と皇太子妃、アメリカ大使、ドイツ大使、ベルギー大使などが名を連ねている。

日本人の出品は次節で詳しく述べるとして、その他の国の出品者からこの団体の特性をみるならば、ひとつにはベルギーの作家が多いということである。特に象徴主義の画家が多く、テオ・ファン・レイセルベルヘ、ジェイムズ・アンソールなどレ・ヴァン（20人会）の会員の出品数が目立つほか、エミール・クラウスなどの名前がある。これらベルギーの作家は1915年の展覧会から名前が確認できるが、その背景には1914年に開戦した第一次

世界大戦がある。ドイツ軍の侵攻によりベルギーから大量の難民が国外に脱出した。イギリスにも避難者が押し寄せ、その数は25万人にのぼったといわれる。そのなかには芸術家も多くいたようで、後節で述べるとおり、イギリスの芸術家たちはベルギー難民としてイギリスに渡った芸術家を支援したことがわかっている。

また出品回数が多い画家としてはフランス出身で1904年からイギリスに移り活動した挿絵画家エドモンド・デュラックが目を引きほか、印象派の画家クロード・モネ、ピエール・オーギュスト・ルノワールの出品も確認でき、イギリスを会場としたクロス・チャネルの文化交流、すなわちドーヴァー海峡を越えた英・仏あるいは英・欧州の往還や同時代性が色濃く表れた展覧会であったことがわかる。そしてこの ISSPG 展はアカデミズム、アヴァンギャルド、いずれも歓迎するような大らかさのある国際展でもあったようだ。国際性という点では、クロアチア出身の彫刻家イワン・メストロヴィッチ（Ivan Meštrović, 1883-1962）<sup>(15)</sup>が複数回出品していることも注目すべき点として挙げられる。

運営、開催についての情報としては、展覧会は午前10時から午後6時まで、日曜は休廊とある。入場料は1シリング、シーズンチケットは2シリング6ペンスであったようだ。また出品作家は絵が売れた場合20%のデポジットを画廊に払うことになっていたことも目録からわかった。

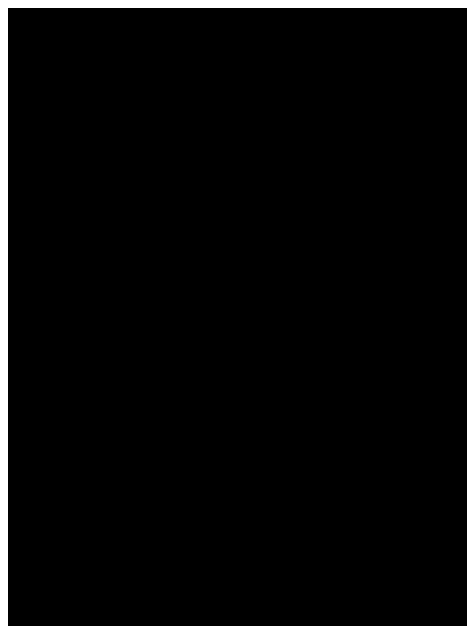


図2 The International Society of Sculptors Painters & Gravers 展覧会目録表紙

そのほかに ISSPG 展目録から読み取ることができた興味深い事実としては、特別展として The Exhibition of

Fair Women を1908年に開催していること、また1909年の年次展に多数の日本の浮世絵版画が出品されていたことである。特に浮世絵展は所蔵者が ISSPG カウンシル・メンバーのチャールズ・リケッツとチャールズ・シャノンという、石橋と懇意にしていたロイヤル・アカデミーの画家2名であった。1909年展は “An Exhibition of Japanese Colour-Prints and Original Drawings by HARUNOBU, SHUNSHO, UTAMARO and HOKUSAI” と題し、No.1からNo.88まで89点がリストアップされており、No.83からNo.88までの所蔵者がジョセフ・ペンネルであると注記されていることから、この6点を除いた全83点がリケッツ、シャノンのコレクションであると解釈できる。

リケッツとシャノンの浮世絵コレクションはこの展示のあと1911年にも ISSPG で展示された。この時は年次展ではなく Century of Art Exhibition 1810-1910 という100年の回顧展として、グラフトン・ギャラリーで1911年6月から7月に開催された。絵画の部門はフランス、ロマン派のテオドル・ジェリコーの作品から始まり、ファンタン＝ラトゥール、ルグロ、会長のロダン、初代会長のホイッスラー、ビアズリー、ステヴァンスなどの作品が展覧された。その中に HOKUSAI として葛飾北斎の作品がNo.274からNo.279まで6点出品され、Lent by C. Ricketts, Esq., and C. Shannon, Esq. として出品者名が明記されている。

1910年前後のイギリスにおける日本の浮世絵版画・肉筆浮世絵の展示については、筆者が2017年に筑波大学に提出した博士論文<sup>⑧</sup>のなかで、1910年日英博覧会における美術史家・桑原羊次郎（1868－1955）の100点の肉筆浮世絵コレクション展示を紹介している。この100点の展示はその後スウェーデンのストックホルム、フランスのパリに巡回しているが、同論文中でも指摘したとおり、筆者のフランス国立図書館での調査によれば、1909年から1914年までパリの装飾美術館でフランスのコレクター、レイモン・ケ克蘭の浮世絵版画のコレクションが大々的に展覧されている。1909年2月 Estampes Japonaise Primitives、1910年1月 Harunobu, Koriusai, Shuncho、1911年1月 Kiyonaga, Buncho, Sharaku、1913年1月 Yeishi, Choki, Hokusai、1914年1月 Toyokuni, Hiroshige、としてケ克蘭関連の展覧会は全5回が確認できた。さらに言えば1910年の日英博覧会の際、日本人の職人による技の実演としてイギリスに派遣された木版画の彫・摺師の漆原木虫（由次郎）は、伝統的な浮世絵の摺りの実演で好評を得て、博覧会終了後は大英博物館の修復担当としてイギリスに残ることとなった。次節に挙げる ISSPG の出品者には漆原の名があり、フランク・ブラングインの原画による木版画を出品したことがわかる。

これらの動向をみるとイギリス・フランスでは日英博覧会を挟んだ1909年から1910年代前半にかけて浮世絵再考、ジャポニスム再考の動きがあり、ケ克蘭やリケッツ、シャノンら特定のコレクターが関与していたことがわかる。このことについては今後も調査を続けていきたい。

### 3. 出品リストから見える日本人画学生の関係性

The International Society of Sculptors Painters & Gravers の年次展覧会における日本人の出品状況は以下のとおりである。目録における記載は出品番号、氏名、作品タイトル、技法の順であった。なお氏名のアルファベット表記には誤記や表記の揺れが見受けられるが、ここでは目録のまま収録し、明らかに誤植と思われる箇所にはアンダーラインを付した。

①1915, Spring, 18<sup>th</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
No.25 CHIUJI KURIHARA/Richmond/Oil  
No.37 CHIUJI KURIHARA/Sunny Noonday/Oil

②1915, Autumn, 19<sup>th</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
No.105 C. KURIHARA/Spring Noon-day/Oil  
No.233 R. C. MATSUYAMA/Still Life/Water-colour on silk  
No.275 R. C. MATSUYAMA/Chrysanthemum/Water-colour on silk

③1916, Autumn, 21<sup>st</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
No.33 T. M. KOUMÉ/Portrait/Oil  
No.201 R. C. MATSUYAMA/Carnations/Water-colour on silk  
No.204 R. C. MATSUYAMA/Quiet Time/Water-colour on silk  
No.249 CHUJI KURIHARA/Joyous Bank/Water-colour

④1917, 22<sup>nd</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
No.240 K. KINSUI/A Joyous Time/ Water-colour on silk  
No.244 T. SATO/Poppy/ Water-colour on silk  
No.257 T. SATO/Peaceful Harbour/ Water-colour on silk  
No.281 CHUJI KURIHARA/Idyll in the Wood/Water-colour  
No.303 K. KINSUI/Ataoshi/Water-colour  
No.306 R. MATSUYAMA/Sketch/Water-colour  
No.308 R. MATSUYAMA/Tiger/Water-colour on silk  
No.321 K. ISHIBASHI/Wild Azaleas/ Water-colour on silk

⑤1918, 23<sup>rd</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
 No.122 TAKO SATO/An Irish Girl/Oil  
 No.166 CHUJI KURIHARA/Landscape/Water-colour  
 No.207 TAKE SATO/After the Snow/ Water-colour on silk  
 No.272 C. KURIHARA/Assembly by a River/Oil  
 No.341 K. KOBAYASHI/Soul of Scholar/Water-colour on silk  
 No.370 H. KOBAYASHI/The Preacher/Water-colour on silk

⑥1918, 24<sup>th</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
 No.248 Y. URUSHIBARA/Messina/Water-colour  
 No.283 TAKE SATO/Eve Balfour/ Water-colour on silk  
 No.299 C. KURIHARA/The Bridge/Pastel  
 No.311 TAKE SATO/Smoking/ Water-colour on silk  
 No.389 TAKE SATO/Dahrias/ Water-colour on silk  
 No.419 K. ISHIBASHI/The New Moon/ Water-colour on silk

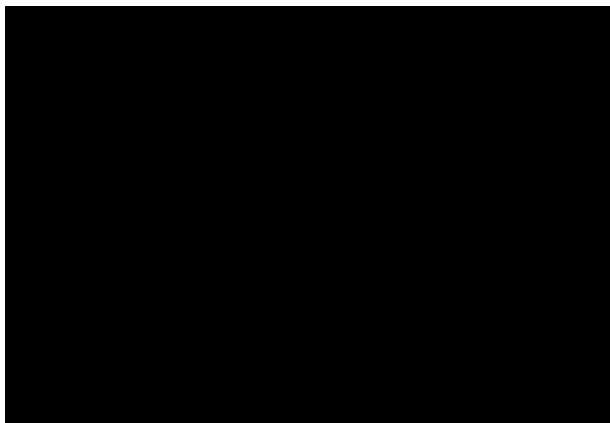


図3 ISSPG 1918, 24<sup>th</sup> exhibition 目録より

⑦1919, 25<sup>th</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
 No.141 R. C. MATSUYAMA/The Scooter/Water-colour  
 No.166 Y. URUSHIBARA/St. Nicholas, Dixmude: Woodcut, after Frank Brangwyn, A. R. A.  
 No.373 C. KURIHARA/Cloudy Monday: Battersea Bridge/Water-colour  
 No.347 R. C. MATSUYAMA/The Vase/Water-colour  
 No.384 K. KOBAYASHI/To see a Saint in the Snow/Manga on silk  
 No.400 K. KOBAYASHI/Chinese Life

⑧1919, 26<sup>th</sup> exhibition, Grosvenor Gallery  
 No.216 Y. URUSHIBARA/ "The Barge", Bruges/Woodcut,

after F. Brangwyn, R. A.  
 No. 373 TAKÉ SATO/An Evening of the Winter/Water-colour  
 No.387 TAKÉ SATO/Tulips/Water-colour on silk

⑨1921, 27<sup>th</sup> exhibition, Grafton Gallery  
 No.209 CHUJI KURIHARA/The Grand Canal, Venice, Water-colour  
 No.248 R. C. MATSUYAMA  
 No.290 R. C. MATSUYAMA/Mammy's Plate/Water-colour on silk  
 No.331 TSUGOURAHU FOUJITA(Japanese; born Tokio)/Porte de Montrouge/Water-colour  
 No.333 TSUGOUHARU FOUJITA(Japanese; born Tokio)/Boulevard Édgar-Quinet/Water-colour

各作家の出品数をまとめると、栗原忠二 10回/松山忠三 10回/佐藤武造 9回/小林錦水 6回/漆原木虫 3回/石橋和訓 2回/藤田嗣治 2回/久米民十郎 1回、となっている。

年代を遡って調べたところでは、栗原忠二が1915年に出品するまでは日本人の参加が見られないが、栗原の出品以降は急に日本人の出品が増える。栗原が最も多い10回の出品をしていることも併せて推察すると、栗原が最初に単独で出品し、翌年に松山忠三を誘って入選、その翌年から徐々に日本人画家が増えていったという流れが浮かび、画家サークルの中心が栗原であったと理解できる。

#### 4. 石橋和訓の事績との関わり

第2節で言及した ISSPG へのベルギー人作家の出品からは、石橋和訓の企画・開催した展覧会について、これまで解明できなかったことに仮説を立てるための根拠が得られた。その展覧会とは1918年(大正7)6月1日から10日までの10日間、日本橋三越呉服店で開催された「欧州大家絵画展覧会」である。この展覧会について筆者は、石橋和訓研究の一つの成果として『国立西洋美術館研究紀要』No.3に論考を発表している<sup>(17)</sup>。詳細については当該論文を参照いただきたいが、この展覧会は第一次大戦のドイツ軍侵攻によるベルギー難民のうちイギリスに避難中の画家7名と、イギリスの画家8名の53点と、ベルギーにゆかりのあるイギリス人作家フランク・ブラングインの104点によるものであった。一部が展示即売され収益は難民救済の義捐金になったという。このチャリティー展は話題となり、駐日ベルギー大使からの丁寧な礼状が石橋に送られており、遺品の中から発見した手紙は上記論文で紹介している。日本とベルギーの友好関

係を象徴するこの展覧会は、石橋が最初の滞英15年から初めて帰朝したときに開催したもので、彼の活動のなかで最も重要である。ところが先の研究で筆者は「欧州大家絵画展覧会」に出品したベルギー人作家と石橋がどのように知り合ったかについては、おそらくブラングインの紹介であっただろうと予想するのみで、その他に確たる証拠を見つけられなかった。しかし今回 ISSPG の出品目録を調査して、1917-8年頃の出品者に「欧州大家絵画展覧会」と同じ名前を発見したことから、この国際展が画家たちを結びつけるひとつの契機になった可能性を認識することとなった。

展覧会の目録となった広報誌『三越』<sup>(18)</sup>に掲載されたベルギー、イギリスの作家リストは次の15名である。

「エツアール・クラエス、デュール・ド・ブリュッケル、レオン・ド・スメエ、マルセル・ジェッフリー、ジョン・ミショー、ジャンネー・モンテニュー嬢、モーリス・ワーゲマン [以上白耳義]、ヘンリー・エス・チューク、ジョージ・クラウゼン、チャアレス・リツケット、チャアレス・シャンノン、チャアレス・シムズ、ジョージ・エー・ストーレー、ジェームス・クイン、アール・ヘエウォース [以上英国]」

『国立西洋美術館研究紀要』に発表した論文で筆者が初めて公開した同展の輸送リストから以上の名前を原文に置き換えると次のように仮定できる。輸送リストは破損しており、部分的に欠落しているため、判読できないところは予測して実在の画家名と対応させた<sup>(19)</sup>。

「Édouard Claes, Jules De Bruycker, Léon De Smet, Marcel Jefferys, John Michaux, Jenny Montigny, Maurice Wagemans ; Henry Scott Tuke, George Clausen, Charles Ricketts, Charles Shannon, Charles Sims, George Storey, James Quinn, Richard Heyworth」

これらの名前と ISSPG の目録を比較すると、石橋が出品した1917年の22回展に John Michaux の名が、1918年の23回展に J de Bruycker、Léon De Smet、Marcel Jefferys (ISSPG のリストでは Jeffrys と誤記) の名がある。これらのベルギー作家の名前はそれ以前の年次展覧会にはないことから、先述した第一次大戦難民としてイギリスに避難したことでの展覧会参加であったことが窺えるほか、石橋とこれらの作家に面識ができた時期がおおよそ1917-18年頃であったことが類推できる。

また、出品画家のひとりとして確認できる小林錦水については先行研究が見あたらず履歴が明らかでないが、石橋と訓関係資料（個人蔵・島根県立美術館寄託；全98箱・総資料数3500点を2014-15年に筆者がすべて撮影、デジタル化している）のなかで発見した大正8年7月22日消印の小林錦水から石橋和訓宛の書簡（図4、5）の本文4葉のうち1葉目、後ろから6行目からの一文に、ISSPG の出品と一致する事実を発見した。以下引用する。

「本年も昨年と同様漫画二点（支那之生活、霧中高聖を訪ふ）インターナショナルソサイテエエキシビションに当選目下開催中価一枚六十五磅」

前節で列举した⑦1919, 25<sup>th</sup> exhibition のリストを見返すと、No.384 To see a Saint in the Snow/Manga on silk が手紙の中の「霧中高聖を訪ふ」であり、No.400 Chinese Life が「支那之生活」であると同定できる。また作品の価格を65ポンドとしていることから、同展への出品作を売却した可能性も窺える。

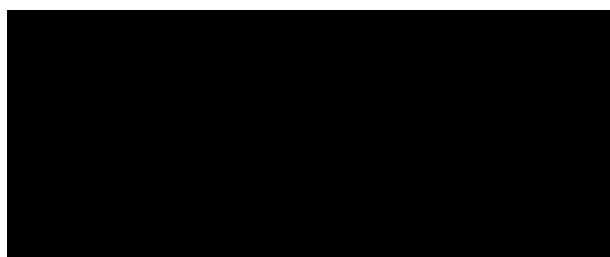


図4 小林錦水から石橋和訓宛書簡（大正8年7月22日消印）封筒  
7 Stanford Bridge Studio, Chelsea, S.W. London  
から東京青山高樹町宛

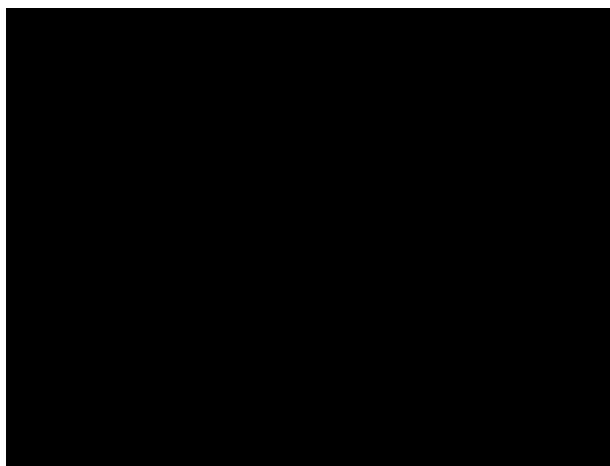


図5 小林錦水から石橋和訓宛書簡（大正8年7月22日消印）本文（4葉のうち1葉目）

## おわりに

以上考察したように、ISSPG 展は1910年前後のロンドンの美術界において重要な国際展であり、特にイギリスと海峡を挟んだフランス、ベルギーほか大陸の芸術家たちのクロス・チャンネルの美術交流に貢献したほか、留学などでイギリスに滞在していた日本人芸術家の集まる場にもなっていた。

日本人作家の出品年度や頻度から読み取ることができたのは、在英、とくに在ロンドンの日本人画家のサーク



ルのなかで栗原忠二が中心的人物であったこと、また第一次世界大戦終戦後、停留していた人とモノの動きが再度活発化した1918年（大正7）に画家・石橋和訓が自身の帰朝にあわせて東京で開催した「欧州大家絵画展覧会」への作品選定に、ISSPG展で形成した人脈が大いに役立っていたことである。

今後は本調査を通して発見した新たな研究課題、すなわち出品作家のなかでも経歴が未だ不詳のままである画家・小林錦水など滞英画家たちの事績、1910年前後のイギリス・フランスでの浮世絵展の実態を継続的に調べていきたいと考えている。

- (1) 星野桂三、星野万美子『洋画家の夢・留学—そこには限らない希望と未来があった』図録、星野画廊、1993年；星野桂三、星野万美子『滞欧作品展 その3—洋画家と留学・美の交流の軌跡』星野画廊、2006年。
- (2) 『パンテオン会雑誌』研究会編、高階秀爾 監修『バリ1900年・日本人留学生の交遊—『パンテオン会雑誌』資料と研究』ブリュッケ、2004年。
- (3) 『描かれた青春—1910年代がおもしろい』図録、秋田県立近代美術館、1997年；研究のアプローチとしては Robert Rosenblum, Maryanne Stevens, 1900: *Art at the Crossroads*, Harry N. Abrams, 2000 を参照。
- (4) 小野文子 監修/執筆・翻訳『ホイッスラー展』図録、NHK/NHKプロモーション発行、2014—2015年。
- (5) 尾崎尚文「国沢新九郎・本多錦吉郎手沢の洋画技法書」『参考書誌研究』第15号、国立国会図書館参考書誌部、1977年、17—34頁；三輪英夫「国沢新九郎の画歴と作品」『美術研究』第321号、東京文化財研究所、1982年、25—32頁；杉原朱美「国沢新九郎のイギリス滞在中の恩師の解明 ジョン・エンドガー・ウィリアムズの経歴と技法」（研究発表〈要約〉）『近代画説』第23号、明治美術学会、2014年、134—136頁。
- (6) 『牧野義雄』図録、豊田市美術館、1997年；牧野義雄（恒松郁生 訳）『霧のロンドン—日本人画家滞英記』雄山閣、2007年；恒松郁生『牧野義雄のロンドン』雄山閣、2008年；『牧野義雄展—100年前、ロンドンを描いた日本人』図録、豊田市美術館、2008年；増子博調『日本人画工 牧野義雄—平治ロンドン日記—』東信堂、2013年。
- (7) 『武内鶴之助—パステルのモノローグ』図録、目黒区美術館、1993年；『日本パステル画事始め—武内鶴之助と矢崎千代二、二人の先駆者を中心に』図録、目黒区美術館、2017年。
- (8) 『静岡の美術Ⅳ 栗原忠二展—英国に架ける橋』図録、静岡県立美術館、1991年。
- (9) 五十殿利治「もうひとりの『バウンドの作家』—久米民十郎に関する新資料について」『筑波大学芸術年報』1994、

筑波大学芸術学系、1994年、6—9頁；五十殿利治「〈タミの夢〉とモダニズム—久米民十郎とエズラ・パウンド」『日本のアヴァンギャルド芸術〈マヴォ〉とその時代』青土社、2001年、189—215頁。

- (10) 高木友次郎編『高木背水伝』大肥前社、1941年。（初版1937年）
- (11) 太田美喜子「東西芸術の架橋—版画家漆原木虫」『浮世絵芸術』第149号、国際浮世絵学会、2005年、38—49頁；小野文子「イギリスにおける木版技術の伝播とジャポニズムの広がり—漆原木虫を中心に」『ジャポニズム研究』第30号、ジャポニズム学会、2010年、96—101頁。
- (12) 『知られざる正統—原撫松展—伝えられた英国絵画のこころ』図録、岡山県立美術館/郡山市立美術館/神奈川県立近代美術館、1997年。
- (13) 『南薫造展—イギリス留学時代を中心に』図録、広島県立美術館、1998年；南八枝子『洋画家 南薫造 交友関係の研究』星雲社、2011年。
- (14) Susan P. Casteras, Colleen Denney, eds., *The Grosvenor Gallery: A Palace of Art in Victorian England*, Yale University Press, New Heaven, 1996.; Colleen Denney, *At the Temple of Art: The Grosvenor Gallery, 1877–1890*, Associated University Press, London, 2000.
- (15) 齊藤祐子「『構造社』研究—イワン・メストロヴィッチとその影響」『眞保亨先生古稀記念論文集 芸術学の視座』勉誠出版、2002年、439—464頁によれば、メストロヴィッチは1915年にロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館で個展を開催し反響を呼んだという。
- (16) 林みちこ「明治政府の対外美術戦略に関する研究—1910年日英博覧会をめぐる」平成28年度筑波大学博士論文。
- (17) 佐藤（林）みちこ「国立西洋美術館寄託フランク・ブラングイン版画104点の来歴について」『国立西洋美術館研究紀要』No.3、国立西洋美術館、1999年、45—60頁。
- (18) 『三越』第8巻第6号、1918年6月
- (19) ベルギー人作家の名前の表記は RKD-Netherlands Institute for Art History のアーカイヴで確認した。

## 図版典拠

図1, 2, 3 Courtesy of the Victoria and Albert Museum, London (筆者撮影)

図4, 5 個人蔵、島根県立美術館寄託（筆者撮影）

## 【謝辞】

本研究をまとめるにあたり、つぎの方々、機関のご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

小豆澤郁子氏、石橋一浩氏、小野文子氏、柳原一徳氏、島根県立美術館、National Art Library, Victoria and Albert Museum, London.

[付記]

本研究は2015－2017(平成27－29)年度科学研究費 基盤研究(A)15H01874『大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究』(研究代表者：筑波大学芸術系 五十殿利治)に連携研究者として参加した2017年度の研究成果の一部である。

(はやし みちこ)